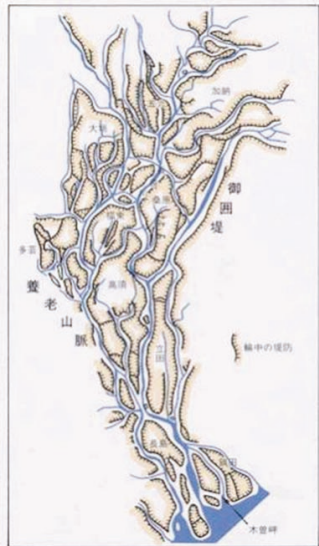


先祖の叡智「輪中」は生きている。

岐阜分室長 大河内 八郎

木曾三川中・下流部の濃尾平野には集落を水害から守るため、圍繞堤を作り水防共同体としての輪中が1600年代から形成されました。その当時の木曾三川の河道は一定しなく網の目のように入り乱れ、大洪水の発生つど本流は流れを変え、尾張から美濃、伊勢へと流れていました。徳川幕府により尾張の国



明治改修以前の輪中分布図

を囲む大堤防が48kmに渡り作られ、「御園堤」と呼ばれ「美濃側の堤防は三尺低くかるべし」と言う不文律まででき、美濃側の水害は頻繁に起こることとなりました。また地形的にも木曾三川の河床は木曾川が一番高く長良川・揖斐川へと低くなっています。しかも洪水の出方は「四刻八刻十二刻」と揖斐川、長良川、木曾川の順に増水してきます。揖斐川沿川の人々は8時間後に揖斐川の洪水を受け、減水したと思えば長良川からの洪水を16時間後受け、再び24時間後に木曾川の洪水を迎える、幾度となく水害により悲惨な目にあっている地域です。そのため人々は、集落の運命共同体としての輪中を作り、水害から生命財産を守ってきました。しかしながら、新しく輪中を作ると輪中内の人々の生命財産は守られますが他の輪中は、遊水地が減少することにより川の水位が上がり危険が増すこととなります。従って新しく輪中を作る場合は、障さわり輪中から約定を取り交わし、進めることとなりますが話し合いは長期に渡り、納得金を差出し築堤にいたっています。約定の取り交わしに100年以上かかっている輪中も見られ、祖先は大変な苦労しながら輪中を作り水害と闘ってきました。

先般7月10日の台風6号は岐阜県西濃地方に豪雨をもたらし、揖斐川・長良川は警戒水位を超える出水となりました。特に揖斐川右岸の大垣市荒崎地区は450戸の床上・床下浸水被害に見舞われました。大垣市荒崎

地区は、大谷川、相川、泥川の合流点上流に位置し、揖斐川本



川の影響も受ける区間で、輪中の発達している地域です。この地区の輪中は1693年から1875年にかけて作られています。下流の障さわり輪中からその後苦情が出され数年調整が続きました。昭和の食糧難時代に遊水地の活用と都市化との影響を受け連続堤防の改修が進められるが、関係者との調整は困難で築堤と遊水地機能の確保との妥協案から大谷川に洗堰が設置されました。今回の出水でも先祖の叡智である輪中の威力は写真に示すように発揮しています。先祖が守り続けてきた運命共同体の輪中は今回の水害からも難を逃れました。昭和51年9月の長良川で破堤した時も輪之内町は輪中により水害を免れ、破堤ヶ所上流部の町では輪中堤を撤去したことにより軒下までつかる水害を受けました。また地域や市街地を守るためにあらかじめ堤防を低くし、越流させる洗堰を設け市街地を守る所もあります。平成12年9月の東海豪雨により新川が破堤し名古屋市や枇杷島町等が浸水被害を受けました。これも治水対策として江戸時代に名古屋の城下町を守るため洪水を越流させる洗堰が作られています。このように洪水から地域を守る施策や地域の知恵が活かされた、輪中・洗堰・遊水地が先祖の叡智として残されています。まだまだ河川改修が万全にならない時には先祖の叡智は有効に利用し活用すべき事を感じました。

この度水害に遭われた皆様には深くお見舞い申し上げます。今後の河川改修のあり方について流域全体の河川改修にご理解とご協力をお願いする次第です。



大谷川の洗堰(2002年7月17日撮影)